

六  
花

り  
つ  
か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai  
designed by masami

3月号

いち  
ち



山田六甲



立春大吉禁酒禁煙禁美食  
ハンガーの時折り揺れて春浅し  
金沢の夢見て寒を過ごしけり  
吾が弟子よ雪嶺のほか見えぬ窓  
水仙よ太陽に目を向けてみや  
敵味方夢に出て来し霜の朝  
春近し夢の話に笑ひ合ふ  
退院の決まりし日なりヒヤシンス

やけ食ひのせんべいおかき春浅し  
日脚伸ぶ笠形山のさましの湯  
脇の芽に傾いてぬしヒヤシンス  
春の雪分讓墓地の見学会  
畦焼の燃えにくさうに燃えてをり  
青空の飛び飛びに来し冬芽かな  
女湯の覚えある声寒もどり  
朽板と湯華の岩や実千両

麦青む午後の足つばマッサージ  
湯上がりの一汁一菜寒卵  
尻痛くなるまで句詠む春の椅子  
冴返る桜の樹皮に日の当たり  
笠形や障子の穴の春の雪  
温泉の卵も寒を過ぎにけり  
ひつまぶし春の障子の足湯茶屋  
立春の太陽が水走りけり  
温泉の岩で背中を搔く寒さ  
棕櫚の木の天辺に吹く春の風  
一本も触れ合はず竹春の風  
春雨に湯上がりタオル絞りけり  
背の固き椅子に春風吹きにけり  
玄関に桜とミモザ活けてあり  
湯上がりの待ち合はせ刻春の雨  
せかさるることが嫌ひや芽吹山

日脚伸ぶ水に沈もる木の葉にも  
濡れ板を歩めば笹子鳴きにけり  
人声の響いてをりぬ春障子  
春雨に珈琲牛乳一気のみ  
如月や小屋を支ふる竹曲がり  
湯上がりの時刻あやふや春の鴨  
如月の石臼に水ありし跡  
竹貼の壁に日脚の伸びにけり  
みとろ姫に日脚伸ばしてをりにけり  
如月の石も朽木も暮れにけり  
如月の杉の木に目を移しけり  
己にも解らぬ怒り二月来る  
如月の水のごとくに出会ひけり  
如月の桶伏せて湯を上がりけり  
ロツカーの鍵は百七日脚伸ぶ  
筆順を少し違へて二月かな

天ばかり見てをり日脚伸びてをり  
佐用郡野焼の跡の棚田かな  
靴下の裏がへし履く二月哉  
露天湯に溺れてをれば二月かな  
如月の雨と減量プランかな  
落款の石は青色二月来る  
元町で筆の櫛買ひ春隣  
療術の予約や雨の春隣  
如月の足腰を揉みほぐさるる  
如月の熊手を持てる招き猫  
風以上水以下でなし如月は  
如月来るカップケーキをめくりし時  
如月や鏡のひびに映る眉  
赤き実も食べつくしたり如月は  
如月の大きな貝の鉦かな  
如月の自動点灯なる廁

階段に靴の蹴り傷如月来  
如月の折りたたみある避難器具  
如月やバレンタインの余りチョコ  
菜の花の沖へ白波立ちにけり  
菜の花の海を泳いでをりにけり  
菜の花にはじかれてゐる蝶々かな  
人情と書けば菜の花明りかな  
菜の花に溺れてひと日昏れにけり  
菜の花が何色に見ゆ蝶々は  
菜の花の蜜をこまめに集めけり  
菜の花や笑つて人を斬るときも  
ひと日雨その次は風黄水仙  
篆刻の月日百代春隣  
屏風絵の焦翁の足袋濡れてゐし  
芭蕉らしからぬ筆太寒明くる  
立春の鳥来て残り柿つつく

立春の岩裏に日のまはりたる  
立春の五葉の松へ風止まる  
如月や奥の細道素龍本  
如月や大酒呑みの旅日池  
水仙は大きな岩を背負ひけり  
寒鯉の色とやうやく判るまで  
薄皮をぬぎつつ春の水仙は  
源泉の祠朽ちをり冬椿  
杉山へ急坂雪の風が来る  
湯治湯は柵田の上や春の水  
探梅のせせらぎの湯に出合ひけり  
枝打ちの始まつてをり春の山  
濡れ崖の杉苗に実がついてをり  
土くれを指に崩してまた耕す  
笹鳴の杉の陰なる雑木かな  
寒の鯉子鯉にひれのふれにけり

寒鯉に水音の入れ替はりつつ  
寒の鯉よろけしごとく退るかな  
石に坐せば水仙の咲き始めたる  
杉の風石のごとくに寒明くる  
如月や赤き実も食ひつくされし  
屏風から冬の怒濤の寄せて来し  
柵の挿したる位置を父移す  
吾に遭ふために生まれて来し蝶よ  
捨て石に膨らんでをり春の川  
春灯に机膨らむわが眼鏡  
探梅の斜面ころがる飼葉桶  
啓蟄はまだ先であり虫が這ふ  
太陽はひとり到一个二月来る  
一月の遠ざかりゆく瀬音かな  
雪達磨人間らしく生きなさい  
金色の日は差しゐても雪は雪

帰る家なしとメールや寒椿  
立春の湯気にけむれる山の景  
早春の黒子ぽろりと落ちし夢  
一日に絵手紙一葉春浅し  
早春やカラオケタイム一時間  
春浅しきなこまぶせる飴もらふ  
立春 大吉 播州弁の艶話  
包み紙引けばくるくる春の飴  
春浅しホワイトボード汚れ来し  
白板の汚れてきたり春浅き  
アコーディオンカーテンを開け春立つ日  
春浅し Kit Kat の日曜日  
天井の虫喰柄や春浅し  
痩せもせず枯れもせずをり春立てり  
痩せもせず枯れもせず春立ちにけり  
立春大吉主宰といへど修行の身

立春大吉笑うた顔を洗ひけり  
立春大吉鼻が胡座をかいてをり  
立春大吉禁じられたる親父ギヤグ  
立春の散るに散られぬ一葉かな  
春の雪おにぎり山を隠しけり  
お四国や硝子曇るか吹雪けるか  
石鎚が投げつけてくる吹雪かな  
この雪をホワイトデーに贈りたし  
暖房の効きたる部屋に腕枕  
牡丹雪伊予の言葉の降つて来し  
お互ひの雪みて過ごすひと日かな  
雪をもて吾を迎へる故郷は  
山脈よ吹雪ける伊予のみかん畑  
雪椿媛を愛する国にかな  
寒明けやタオル絞ればいで湯の香  
寒や湯に坊ちやん泳ぐべからずと

# 鴨沂抄

中村房枝

あたたかし

宴席のはじめ白魚啜らされ  
蒔く前の牛蒡の種を嗅いでをり  
道中のまたよろしくて智恵詣  
ゆくたてを語るはこごみ食べながら  
桃咲いてやがては水となる我れか  
笑ひとばすさみしさひとつ三月菜  
さいならにほなとうなづき春の暮  
鬱の文字きちんと書いてあたたかし  
啓蟄の崖なかほどの祠かな  
昼食にみな立ち行けり雛納め



# 林檎むく長い手紙を読むやうに

ことり

てこ入れて開ける井戸蓋いてふ降る

一呼吸周りに遅れ郁子揺るる

仇色に郁子の実熟れてをりにけり

晩秋の瀬にふくらめる夕日かな

主人公は、りんごを剥いていてふとりんごに関わるあることを思い出してきた。掲句、敢えて説明する必要はないが、恋人からの手紙だったのか、映画フィルムのようにセピア色の思い出が次々と甦ってくるのか。読者は、この句に自らの経験や体験に当てはめて句を味わえばよい。記憶しやすく、「に」の連用止めが次々と繰り出すさまの効果を高めている。比喩が類想でないかを少々恐れるが敢えて推す。

母にだけ木枯し吹いてゆきにけり  
いば 智也

冬の雨音なきあ朝となりにけり  
明るくて冬満月を仰ぎけり  
寒椿雪より白く咲きにけり  
山茶花の雪より白く散りにけり

木枯しの中に主人公と母親がいながら「母にだけ」と限定して言い止めたからこそ詩になった。実際には、年老いた母親の方が主人公より寒く感じているにちがいない、と母親を氣遣っている。その気持ちが読者に強く伝わってくるのだ。そのことを自らの比較表現をするのではなく、母親に焦点を絞ったことも句を引き締めている。

特別同人作品

六<sup>りっ</sup>  
卿<sup>けい</sup>  
集<sup>しゅう</sup>

(五十頁送り)

いつのまに

笹村 政子

湖東ゆくいつもどこかにしぐれ雲  
枯蓮の重なる一本づつの棒  
いつのまに人の居らざる冬桜  
職退きて海遠くあるちやんちやんこ  
胃カメラを呑みたることも十二月

# 檀木集

冬銀河

池崎るり子

一年のほこりうつすら煤払  
葉牡丹の紅の濃くなり弥増して  
辛口の新酒供へし父恋ふる  
数へ日や朝刊チラシ少し減り  
石垣へ修学旅行冬銀河

慶び

物江 昌子

慶びの玄関に生け青木の実  
石段や桜紅葉の吹き溜まり  
バス停の落ち葉を掃きてポランティア  
石段の桜紅葉をよけ上る  
温もりで香り濃くなる寒の菊

かすかに

いば 智也

冬の雨音なき朝となりにつけり  
明るくて冬満月を仰ぎけり  
寒椿雪より白く咲きにけり  
山茶花の雪より白く散りにけり  
母にだけ木枯し吹いてゆきにけり

# 六花集

六甲選

田尻 勝子

風の端にフリルのついて春がすみ  
たんぼぼや度強き酒に漬けてみよ  
群落葉音たて登る北野坂  
差し色の赤き車や雪の街  
みどり児の衣すすげば聖き雪

平居 滯子

着ぶくれて訪ふ母もまた着ぶくれて  
毛糸編む教はる端から忘れては  
十二月喜怒哀楽のはかなくて  
なつかしきいとしき心地隙間風  
魂を地上につなぐ風の糸

延川 笙子

わかやぎすずめ

初雪の舞い降りてくる朝かな  
梢から咲きこぼれたる雪の花  
悲しげに日に向いており雪たるま  
三本のキャンドル吹き消し雪の夜  
雪の夜の優しき言葉降り積もる

犬よりも猫好きの我宝船  
少子化の歯止めとなれや年男  
老犬の介護気にしつ新年会  
初夢や二十歳の我に帰りたる  
年女ばかりが寄りて女正月